２０歳のころインタビュー
株式会社喜代村　木村清様

日本大学経済学部　加藤恭子ゼミナール　佐々木　牧野　竹内

・インタビューの目的
私たちはこの二十歳のころでインタビューさせていただく社長を探す際、一から会社を作り上げるという苦労を経験していること。経営者として前線に立ち奮闘している社長であること。また、会社名だけでなく社長自身が有名であること。これら３点を条件としました。これは我々が会社の創業に興味があったこと、そして、求心力のある強いリーダーにお話を伺ってみたかったことが理由です。

・インタビューのお相手
株式会社喜代村
東京都中央区築地に本社を構え、「すしざんまい」を関東中心に 55 店舗展開するすしチェーン店である。このほかにも食材の輸入･卸売りや水産加工品の開発･製造、弁当の販売など多方面に事業を手掛けている。

株式会社喜代村代表取締役社長　木村清
1952 年千葉県で生まれ、４歳にして父親を亡くす。中学卒業後、15 歳でパイロットを目指し、航空自衛隊に入隊するも事故で目を患いその夢を断念し、５年９カ月で退官。自衛隊在籍中に中央大学法学部（通信教育課程）に入学。弁護士を目指し司法試試験にチャレンジするが、学費を稼ぐためにアルバイトとして入った水産会社で水産業の魅力に惹かれ、正社員となる。その会社で魚の仲買人になり、築地市場で多くの取引先を持つようになる。1979 年独立し、喜代村の前身となる木村商店を創業した。木村商店では弁当屋、カラオケ店、レンタルビデオ店など 80 以上の事業を手掛け、85 年に喜代村を設立した。バブル崩壊を機に事業展開を見直し、現在ではすしざんまいを中心にした会社経営を行う。

・インタビュー内容
木村社長は元々ビジネスに興味はあったそうですが、戦闘機のパイロットになるという夢があり、自衛隊に入隊しました。しかし、怪我でその夢をあきらめました。もし何事もなく自衛隊を続けていれば、私は戦闘機のパイロットになっていたと振り返ります。自衛隊退官後は、アルバイトや司法試験にチャレンジするなど、数々の経験をし、たくさんの失敗をしたそうです。木村社長が我々と同じ二十代のころ、努力していたことは体力づくりと勉強です。自衛隊では毎日想像を絶するほどの厳しい訓練に励み、自分を限界まで追い詰められたことで、肉体と精神が鍛え上げられました。その経験は、社長になった今でも

生かされていると仰ります。大学では、弁護士になることを目標に掲げ、一心不乱に勉強に励みました。それは、将来への不安があったからだと言います。
そんな社長が今の若者に求めるもの、それは「明るく、楽しく、元気のよい」ことです。それには健康、人間関係、金銭関係これら三つの要素が重要だと言います。そして社長は何事にもチャレンジしてみてほしい、海外に目を向けたり事業をやってみて欲しいとも仰っていました。
木村社長が社長とし大切にしていることは相手を信用することと情報共有だそうです。まず自分から相手を信用しないとビジネスは成り立たない。そして、従業員と情報を共有し一丸となって事業を進めることが重要だと語ります。
次に社長の原動力をお聞きしました。人は一人で生きているわけではない、人に生かされている。人に頼られたり人から必要とされること、また、人に幸せを与えること。これが原動力であり幸せだと教えてくれました。

・インタビューを終えての感想
私たちが社長から伺ったお話の中で印象的だったお言葉をあえて一つ挙げさせていただくとすれば何事も実行してみないと分からないというお言葉です。数々の挑戦を、そして苦難を実際に経験されてきた社長から直に聞くこのお言葉はずっしりと重みがあるものでした。私達は大学に入ってから何かに挑戦したことはあったか、やりたいと思っていたことを実際に行動に移したことが果たしていくつあっただろうか、分かっていないことを分かった気になっていないだろうか。考え出すときりがありません。残りの大学生活、何をすべきか、そして何をやりたいか。今回のこのインタビューは自分の大学生活について真剣に考え直す機会となりました。